

寧樂懷古 (太宰春台)

南土 茫茫たり 古帝 城

三条 九陌 自ら 縦横

藉田 麦 秀でて 農人 度り

馳道 蓬 生じて 賈客 行く

細柳 低く 垂れて 常に 恨を 惹き

閑花 歴乱として 竟に 情 無し

千年の 陳迹は 唯 蘭若

日暮 呦々として 野鹿 鳴く

南土茫茫古帝城 三條九陌自縦横
籍田麥秀農人度 馳道蓬生賈客行
細柳低垂常惹恨 閑花歴亂竟無情
千年陳迹唯蘭若 日暮呦呦野鹿銘

解説 かつて栄えた寧樂の都を懷古して作つたもの。

語釈 ※寧樂 奈良をいう。 ※南土 南方にある土地。奈良。南都ともいう。

※茫茫 〓はるか遠い昔をいう。 ※三条九陌 〓三すじと九すじある通り。いずれも都の大通りをいう。 ※籍田 〓昔、天子が天や祖先を祀るための米を自ら耕作した田地。

※麦秀 〓秀は稲や麦がのびて生長すること。 ※馳道 〓天子の通り道。御成り道。 ※賈客 〓客：旅の商人。行商人をいう。 ※細柳 〓柳の糸をいう。 ※閑花 〓心静かに咲いている花。 ※歴乱 〓花が咲き乱れているさま。 ※竟無情 〓花には古い都をおも

人の心などわからない。 ※陳迹 〓古い時代のあと。旧跡。 ※蘭若 〓寺院。 ※呦呦 〓鹿の鳴く声。

通釈 奈良の古い都には、三条九陌と街路が自然に縦横にのびていたが、いまや、天子御手植えの田であつた所には麦がのび、農民が野ずらを歩いている。天子の御成り道は荒れはてて蓬が生え物売りが歩いている。かつて、天子や貴人たちがめでた柳の糸は昔と変わらず低くたれてはいるが、なんとなくうらめしい気持ちにさせられる。閑雅に咲き乱れている花には、古の都をなつかしむ人の感情はわからない。千年も昔の都の跡には、ただ寺院をのこすのみである。日暮れになると野辺の鹿の鳴き声がいっそうわびしさをつのらせる。